

## 【附子】

附子（ぶし）は、キンポウゲ科の多年草、トリカブト属で、薬草の古典である神農本草経（しんのうほんぞうきょう）では、急性疾患に用いられる作用の強いおくすりとして収録されています。

「寒湿痺（関節リウマチ様の疾患です）、咳逆上気（激しい咳やのぼせ感）を除き、積聚（しこり）や寒熱（寒気がしたり、熱が出たりすることです）を去る」とその薬効が述べられています。交感神経系の興奮作用と新陳代謝機能を亢進させる目的で使用されます。

成分のアコニチン・アルカロイドの毒性は結構強く、矢毒や槍毒として狩猟に用いられました。この附子は、漢方では非常に体の弱った方に用いる特効薬で、心臓の働きを強め、速やかに尿量を増やす作用があります。また、「痛み」に対する作用を生かして、身体諸所の関節痛や四肢の冷え（症状が重い場合）に用います。しかし、加熱処理をしますとアコニチンの毒性は著しく減少し、逆に西洋医学の強心剤として用いられるジギタリスに似た強心作用が認められます。

日常の臨床では、何らかの修治（熱処理）を施して用いています。